Chapter 41 : **マスコットが温もりを取り戻す方法 Part 2**

雪に包まれたコテージでの暮らしは、まったりとした穏やかなリズムへと落ち着いていた。ピカチュウは今やグレイシアの助手として信頼され、給料をスナイプされることもなくポーキーマンを安心して閲覧できるようになった。

ある気だるい午後、彼が一人でクスクスと笑っていると、グレイシアとリーフィアが何気なく隣に寄ってきて、彼の画面を覗き込んだ。

「お、」リーフィアが頷いた。「このアニメーションは良い感じだね。」

「影は微妙だけど、ポーズが可愛いわね。」とグレイシアが付け加える。

言葉にしなくても、理解し合っていた。みんな一度はポーキーマン期を経験する。この家族において、羞恥はメニューにない。

その頃、裏庭のプールでは、シャワーズがフレアドライブをお姫様抱っこして、今学期169回目のレスキューにため息をついていた。彼は焼きパイナップルの上で昼寝中に気絶していたのだ。びしょ濡れの炎の丸太のように彼を再び抱え上げ、シャワーズはタオルラックへと歩き出す。

そのとき、ふと前庭に目をやると、ピカチュウがアローラライチュウの女の子と緊張しながら会話しているのが見えた。明らかに動揺しているピカチュウは、手元が狂ってポケパッドを落とし、ポーキーマンのタブが開いたままの状態に。慌てて隠そうとする彼に、ライチュウは優しくそれを拾い上げ、画面を見ようともせず、微笑みながら差し出した。非難も、からかいもなかった。

シャワーズは小さく息を呑んだ。「ピカチュウが…ナンパしてる？」

フレアドライブは彼女の腕の中で瞬きをした。「えっ、まさか…成功してない？」

二匹はそっと近づこうとしたが、グレイシアが軽く笑いながら間に入った。

「そっとしておいてあげなさい。」

彼女は分かったように微笑んだ。「それは彼の“癒しのフェーズ”。邪魔しないのがルールよ。」

雪深い谷の遥か上、陽光に照らされた崖の上では、スイクンがホウオウの隣に立ち、眼下の幸せそうなコテージを見つめていた。

「ピカチュウ、ようやく静電気の外に火花を見つけたのね。」スイクンが静かに語った。声はまるで穏やかな水面のように優しく揺れていた。

ホウオウは低く、温かく笑った。「時間がかかったのぅ。でも嵐ってのは、そういうもんじゃ。」

スイクンは目を閉じ、風がたてがみを撫でるままに任せた。「あの川を凍らせたのは、ただのミームを止めたかったわけじゃない。時間を与えたかったの。彼が、自分を思い出せるように。」

下では、笑い声が木々を抜けて響いていた。ピカチュウはアローラライチュウにお辞儀をした。シャワーズはフレアドライブにタオルをかけてあげた。グレイシアはリーフィアの隣で冷たいお茶をすすっていた。ニンフィアはサンダースの毛にリボンを編み込んでいた。

【しばしの間…すべてが穏やかだった……が――】